九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[04_01]九州大学大型計算機センター広報表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/1467972

出版情報：九州大学大型計算機センター広報. 4 (1), 1971-02-25. 九州大学大型計算機センター
バージョン：
権利関係：

随　　想

九州大学大型計算機センター
プログラムライブラリ委員会
委員長　　工藤昭夫

新年の数日を身辺整理にあてて過したが、積重ねた書類の下から、一昔前に、モンロー計算機などを使ってやった計算紙が出て来て、懐かしさを感じました。

手動のタイガー計算機から、電動のモンロー・マーチャントなどの電動計算機に移りつつあった時代に東大で真空管の電子計算機ＴＡＣを組立てていた友人の失敗談を思い出します。リレー式のＦＡＣＯＭ第一号機を使わせて頂いて、数時間悪戦苦斗の末、あきらめて、数人がかりでＦＯＲＴ－ＲＡＮＳＩＴでプログラムを書き上げて、ＩＢＭの社員数名に、おつき合い願って、ＩＢＭ 650に再度いどみ、山をなすカード出力が全部失敗で、結局得たものは、数個の数値のみであったことなど、失敗の繰り返しばかりが思い出されます。

九大センターのプログラムライブラリ委員長を仰せつかって、センターの研究開発室のかたがたと接触して、丹念に一匹一匹、プログラムの中の虫をつまみ出している姿を想像し、利用者の方々に、彼等の地味な仕事の重要性についての理解と同情を訴えたいと思います。

情報化時代とか、技術革新とか、言われていますが、計算機の発達の異常な速度を考えますと、大学とは、何か、既成の学問を教えるところと云うよりは、勉強のやり方を学ぶべきところであり、卒業生は一生勉強を続けなければならない時代に変って来たことを痛感します。理学部の数学科の卒業生がこの十年間、以前には考えられなかった分野にどんどん進出、就職していることは、このように時代を把握して見ないことには分らないと思います。米国の大学院学生がPh. D. を取ると、研究課題をかなぐりすてて、実地の分野に就職してしまうという現象は、単に国民性の相異などで説明出来ることではなく、米国が既に、研究成果によって、生計をたてている国になりつつあることに深い原因があると思われます。日本の生活程度の向上に伴い、いわゆるチープ・レーバーにたよって生計をたてる時代は終りを告げつつあり、研究の投資の重要性が切実になりつつあります。また公害問題もその一端に過ぎませんが、生物科学も、単に医学や農学と関連した純粋科学であるのみではなくなってしまう時代が近づいているように思われます。

話が大きくなりましたが、最後に計算機、特にライブラリプログラムの利用に際して注意すべきであると思われる点を一つ述べさせて戴きます。cook book type statistician と云う言葉があります。料理の本にたよると同じように統計の手法を使って、意味など、とくに考えずにデーターを処理してしまう統計家のことです。計算機が高度になるに従って使用方法を誤ると計算機の中で貴重な情報が、発生すると同時に、泡沫のように消えてしまって、極めて一部分の情報しか出力されていな

いことになってしまう可能性があります。

私自身の米国での経験ですが、半年近くかかった計算が、サブルーチンまで解体し、アルゴリズムを検討したところ、数週間の作業で出来た筈であったことが分りました。米国での私の研究室のように、冬期にスチームが強過ぎて、冷房を同時に入れないと暑くて過せなかったと同様な無駄を計算機にさせておったわけです。

既在の統計解析関係のプログラムを調べて見ると同様な危険を感じさせるものがいくつかあります。九大の大型センターのプログラムライブラリーも、量的充実の必要性とともに、質的にも立派なものを整備したいものです。

1971年1月9日